

大塚神明神社

館山市船形字宇田川三八七



汐切山の上にある大塚神明神社

祭神

由緒

天照大御神
大正十二年の関東大震災以前までは大塚神明神社の下までが汀線であり、その場所は岬になっていました。昔は白木造りの社殿でしたが、潮風のせいか痛みが激しく、現在はコンクリート造りの社殿に再建されています。また、南西からの強風にあおられた波を防ぐための石垣が、根岸の竜神社から大塚神明神社を通り、柳塚の弁天様の先まで続いていました。現在もこの石垣は当時のままの姿で残っています。

一月十五日に一番近い日曜日には御歩射が行われ、五月十三日に近い日曜日には神明神社の宵宮が行われています。



今でも残る神明神社下の石垣

自慢の祭

大塚区では祭礼で中心的な役割の青壮年会の他に熟年会や老人会、子供達を含め、幅広い世代の人が一団となって祭礼を盛り上げています。縄周りと呼ばれる「宵祭り」には小山車を引き回し、大きい山車では入れない町内の隅々にまでお囃子が響き渡ります。

例年七月の第四土・日に行われる船形地区総氏神である諏訪神社の例大祭に出祭するときは、安房随一の山車とともに大塚青年団は、藍染め半纏の背中に抜かれた「大青」の文字を誇りに、大塚ならではの威勢



地区一体となった引き回し



平成21年に新調された胴幕



自慢の総樑造りの重厚な山車

のよい引き回しを魅せます。囃子台の屋根上では巨大な二本の「大漁」の旗が力強く振られ、引き回しに花を添えます。船形の祭の代名詞とも言える「御浜出」がなくなっているから、その曳き回しの心意気は、現在の若者たちにしっかりと伝えられています。

本祭りの夜も更けた頃、引き回し最後の見せ場である山車小屋までの坂登りで、四トンを超える山車を最後の力を振り絞って引き上げる大塚青年団のその勇姿は圧巻です。大塚の山車には後ろにも縄が付けられていて山車小屋の前では、前と後とでの引き合いが始まります。祭を終わらせまいとして前に引つ張る子供達に大人たちも加わり、祭が終わってしまうのを惜しみます。



大塚の半纏

船形諏訪神社の例大祭

祭礼日

七月第四土曜日・日曜日

船形地区の総氏神である諏訪神社の例大祭には、大塚、堂の下、浜三町、柳塚、根岸、川名の六地区から、山車、屋台、御船が出祭します。昔は、宵祭、本祭、過ぎ祭の三日間執り行われていましたが、現在は宵祭と本祭の二日間だけになりました。

船形の祭の見せ場は、なんと言っても「御浜出」です。仲宿の浜から砂浜に入り、山車・屋台の前車輪部に丸太で組んだやぐら入れ、持ち上げては引つ張る、



御浜出で勇壮な引き回しを行う大塚の山車



川名の浜に集合した船形地区の山車・御船

また持ち上げては引つ張るの繰り返して、堂の下の方まで引きずり進みます。山車・屋台の屋根上では漁師町の心意気を出す大漁旗が威勢よく打ち振られ、朝方まで行われたこともしほしほだったそうです。御神輿ならいざ知らず、山車、屋台までが浜に入るこのお祭りは他に類がなく、その光景は勇壮かつ豪快で、担ぎ手、引き手、観客が一体となった感動の連続でした。しかし昭和五十二年、この浜に防波堤が作られたため、六地区が競った浜出しができなくなり、昭和六十二年堂の下区が行った御浜出が最後となりました。

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。